

県営ほ場整備事業（昭和54年度）
埋蔵文化財緊急発掘調査報告

北原東・北原西

1980

長野県上伊那郡飯島町
南信土地改良事務所



序

飯島町においては、昭和48年より県営は場整備事業が開始され、今年度は七久保地区第20工区北村地籍が実施されています。

当地籍は、中央アルプス県立公園千人塚の麓にあたり、古くから集落が発達した地域であり、文化財保護の立場から飯島町遺跡調査会に依頼し調査を行ないました。

幸いにも南信土地改良事務所の御配意と、県教育委員会文化課の御指導の下、優秀なる調査団の先生方により大きな成果をあげられたことは、感謝いたえません。

出土品については、飯島町陣嶽館に展示し一般の方々に見ていただく予定です。

調査報告書の刊行に当って関係各位に対し心から謝意を捧げる次第であります。

昭和55年3月20日

飯島町教育委員会教育長

熊崎安二

P1 遺跡遠影（西から）



凡 例

1. この調査は、県営ほ場整備事業に伴なう緊急発掘調査で、調査は南信土地改良事務所の委託により、飯島町が実施した。
2. 本調査は、昭和54年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述はできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
3. 本文の執筆は、友野良一、伊藤 修、中村正純が行なった。
4. 本報告書の編集は、主として飯島町遺跡調査会があたった。

〔発掘参加者名簿〕

那須野万治、伊藤忠一、星野一雄、宮下百江、横田愛子、宮下きくゑ、中村正純、那須野咲子、宮下清、松永福実、桃沢義高、那須野松太郎、宮下昌一、上山 啓、上原正人、北沢保雄、宮下金美、宮下貞一、荒木辰雄、高谷秀雄、宮下まつゑ、竹内まさい、宮下末子、宮下千代、宮下 秀、宮下富夫

目 次

序

凡 例

目 次

挿図目次・図版目次

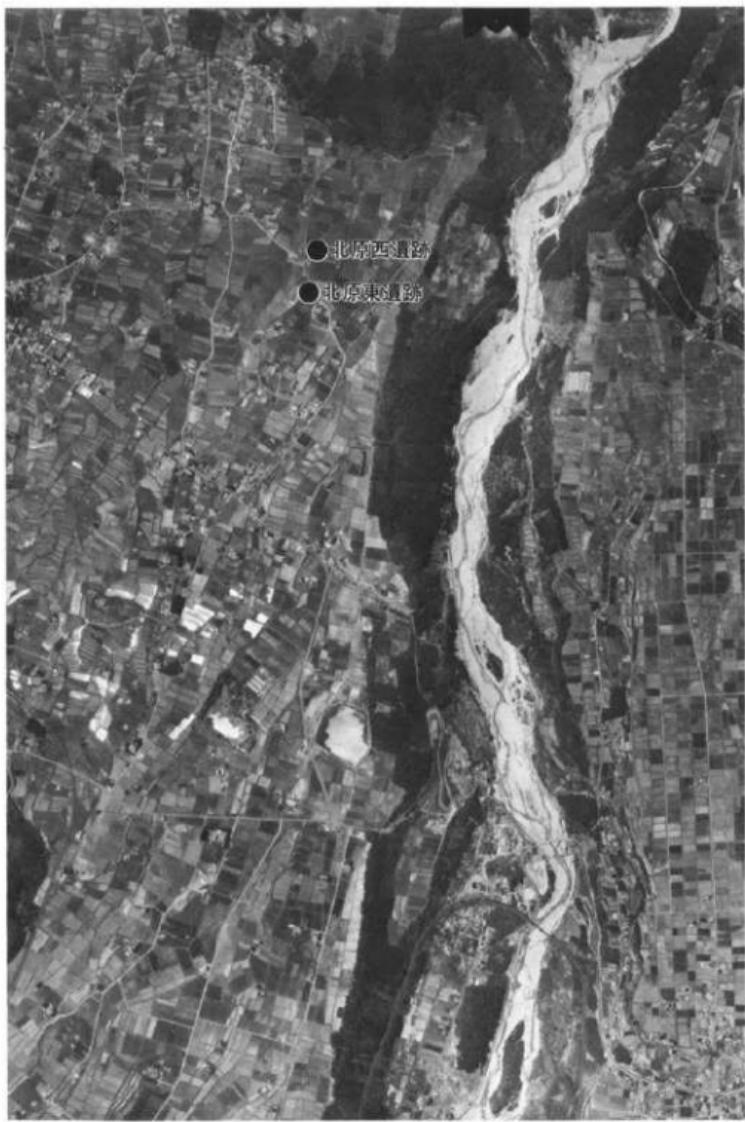
第Ⅰ章 遺跡の概観	2
第1節 位 置	2
第2節 地形・地質	2
第Ⅱ章 発掘調査の経過	4
第1節 発掘調査に至るまで	4
第2節 調査日誌	4
第Ⅲ章 北原東遺跡	5
第1節 遺 構	5
第2節 遺 物	5
第Ⅳ章 北原西遺跡	7
第1節 遺 構	7
第2節 遺 物	32
第Ⅴ章 まとめ	34

挿図目次

第1図 位置図.....	2	第2図 地形図.....	3
第3図 北原東遺跡調査地区.....	5	第4図 出土土器.....	6
第5図 出土石器.....	6	第6図 遺構配置図.....	7
第7図 第1号住居址.....	8	第8図 第2号住居址.....	9
第9図 第3号住居址.....	10	第10図 第4号住居址.....	11
第11図 第5号住居址.....	12	第12図 第6号住居址.....	13
第13図 第7号住居址.....	14	第14図 第8号住居址.....	15
第15図 第9号住居址.....	16	第16図 第10号住居址.....	17
第17図 第11号住居址.....	18	第18図 第12号住居址.....	19
第19図 第13号住居址.....	20	第20図 第14号住居址.....	21
第21図 第15号住居址.....	22	第22図 第16号住居址.....	23
第23図 第17号住居址.....	24	第24図 第18号住居址.....	25
第25図 第19号住居址.....	26	第26図 第20号住居址.....	27
第27図 第21号住居址.....	28	第28図 第22号住居址.....	29
第29図 土壌(C地区).....	30	第30図 土壌(D地区).....	30
第31図 第1号集石.....	31	第32図 第2号集石.....	31
第33図 第3号集石.....	31	第34図 出土石器.....	33

図版目次

P 1 遺跡遠影(西から).....	序	P 2 遺跡航空写真.....	1
P 3 調査状況.....	5	P 4 調査状況.....	5
P 5 調査状況(東から).....	6	P 6 第1号住居址.....	8
P 7 第2号住居址.....	9	P 8 第3号住居址.....	10
P 9 第4号住居址.....	11	P 10 第5号住居址.....	12
P 11 第6号住居址.....	13	P 12 第7号住居址.....	14
P 13 第8号住居址.....	15	P 14 第9号住居址.....	16
P 15 第10号住居址.....	17	P 16 第11号住居址.....	18
P 17 第12号住居址.....	19	P 18 第13号住居址.....	20
P 19 第14号住居址.....	21	P 20 第15号住居址.....	22
P 21 第16号住居址.....	23	P 22 第17号住居址.....	24
P 23 第18号住居址.....	25	P 24 第19号住居址.....	26
P 25 第20号住居址.....	27	P 26 第21号住居址.....	28
P 27 第22号住居址.....	29	P 28 B地区近影.....	31
P 29 出土土偶.....	32	P 30 A地区(南より).....	35
P 31 D・E地区(北より).....	35	P 32 F地区(南より).....	36
P 33 D地区(北より).....	36	P 34 C地区(北より).....	36
P 35 出土石器.....	37		



P 2 遺跡航空写真

第Ⅰ章 遺跡の概観

第1節 位 置

北原東、北原西遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字七久保北村地籍に所在する。

当該遺跡は、七久保地区の北西端に位置し、与田切川により形成された扇状地の扇頂部にある。遺跡に至るには、国鉄飯田線七久保駅で下車し、西へ約1kmほど歩き、県道飯島・飯田線にそって北へ約2km、さらに西へ1kmほど歩いたところである。遺跡の中心で標高は780mをはかる。

第2節 地形・地質

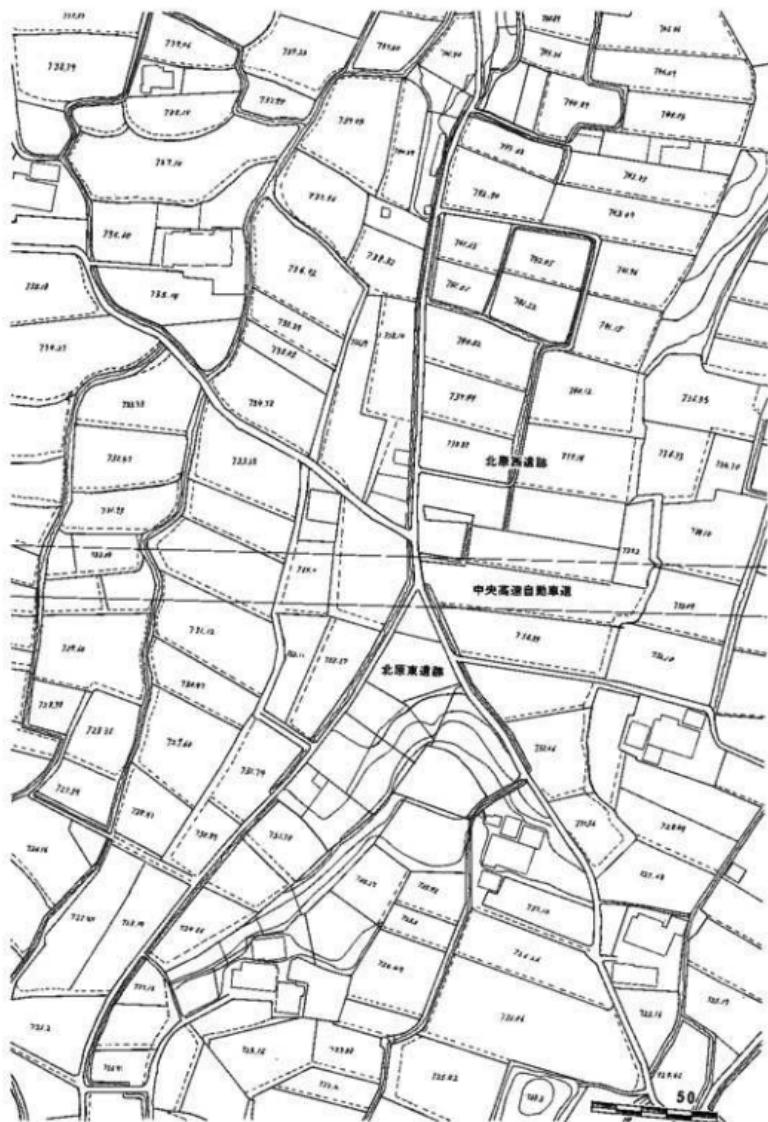
木曾山脈と赤石山脈に挟まれた伊那谷は、一口に南北に細長い縱谷状地形といえる。この中央部を天竜川が南流し、天竜川に向かって西の木曾山脈、東の赤石山脈に源を発する中小河川が流れ込んでいる。これらの中小河川は山麓にいくつもの扇状地を形成したが、その後の隆起運動により、これらの扇状地を自ら浸食していく。

飯島町についても、中田切川、与田切川、日向沢川等の中小河川の浸食、堆積作用により扇状地が発達している。当該遺跡は、与田切川により形成された扇状地の扇頂部に位置し、北側は与田切川の渓谷、南側は東西の窪地となり、これらにより小高い丘陵となっている。

調査地区的土層については、遺跡付近が古くからの水田地帯であり、擾乱されているため明らかでないが、およそローム層、褐色土層、黒褐色土層、黒土層の順で堆積していると思われる。表土よりローム層までは50~60cmをはかる。遺構はローム層を掘り込んでおり、遺物は主に黒褐色土層より出土した。



第1図 位置図(1:100,000)



第2図 地形図(1:2,000)

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

県営は堤敷備事業七久保地区第20丁区にある北原東、北原西遺跡の埋蔵文化財緊急発掘調査を飯島町では、飯島町遺跡調査会に委託し実施した。

〔飯島町遺跡調査会〕

会長	熊崎 安二	(教育長)
理事	片桐 修	(飯島町文化財調査委員)
	宮下 静男	(ク)
	北原 健三	(ク)
	桃沢 匠行	(ク)
	松崎 研定	(ク)
	中島 深雄	(ク)
	片桐 佳彦	(ク)
	小林 嘉男	(ク)
監事	堀越 清志	(飯島町監査委員)
	中野 武司	(ク)
幹事	吉沢 内次	(飯島町教育委員会教育次長)
	米沢 長実	(ク 係長)
	伊藤 修	(ク 主事)
	宮下 敏江	(ク 主事)

〔発掘調査団〕

団長	友野 良一	(日本考古学協会員)
調査員	伊藤 修	(飯島町教育委員会主事)
	和田 武夫	(長野県考古学会員)
調査補助員	中村 正純	(飯島町)

第2節 調査日誌

北原東、北原西遺跡の調査における主だった項目を拾ってみた。

○調査は、調査地区全体に2m四方のグリットを設定し行なった。

○北原西遺跡は、調査地区が広いえ、遺物包含層が深いため、ブルトーザーにより表上剥ぎを行なったうえで、遺構確認を行なった。

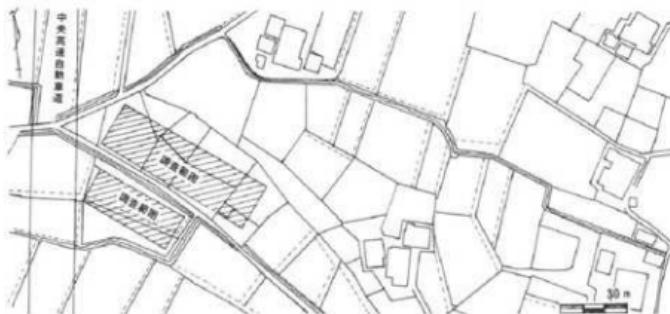
○遺物について、主要なものは平面図に出土点、出土高等を記録した。

○遺構については、平面図の他にできる限り遺構断面の土層についても記録を行なった。

第Ⅲ章 北原東遺跡

第1節 遺構

遺跡の中心部と思われる丘陵中央部の畠地を中心に $1,000 \text{ m}^2$ の調査を行なった。
遺構は確認されなかった。



第3図 北原東遺跡調査地区(1:2,000)

第2節 遺物

今回の調査で縄文時代中期の土器片20点、縄文時代の打製石斧1点、横刃形石器1点が出土した。土器片は、全てが黒色土層より出土の磨滅した小破片であり、西側に隣接した北原西遺跡からの流れ込みの可能性もある。



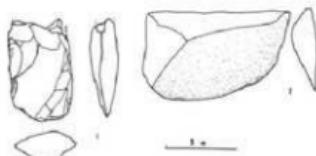
P3 調査状況



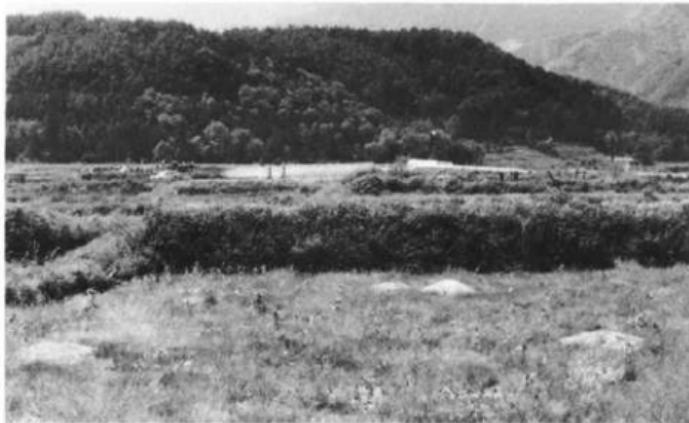
P4 調査状況



第4図 出土土器(1:2)



第5図 出土石器(1:3)

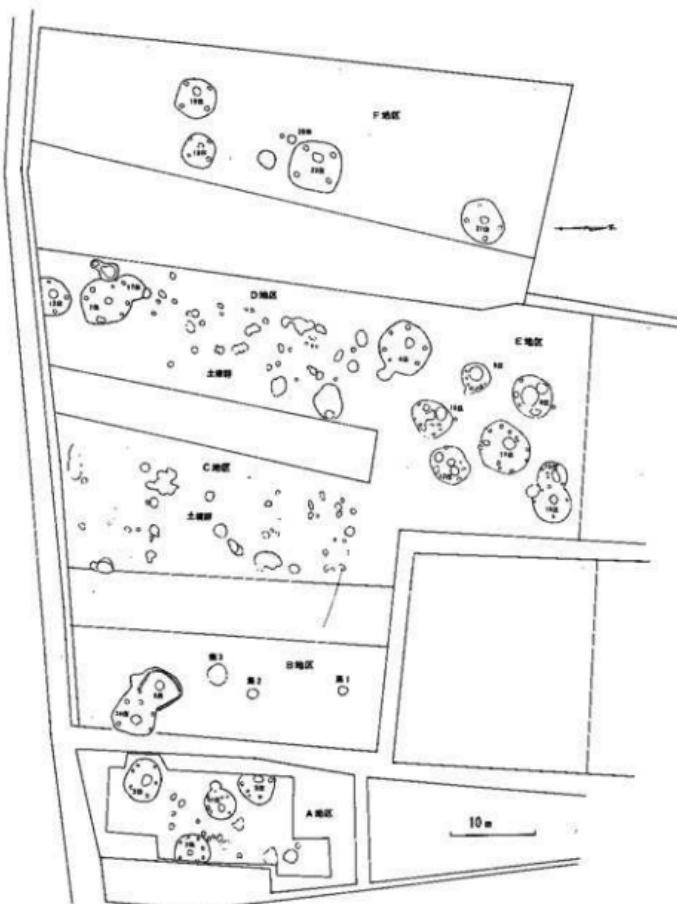


P5 調査状況(東から)

第Ⅳ章 北原西遺跡

第1節 遺構

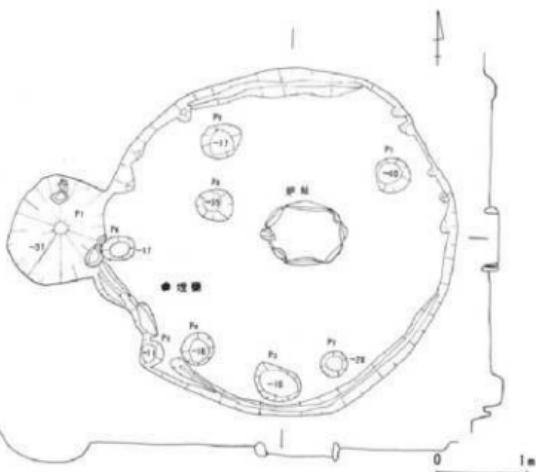
今回の調査で縄文時代中期の住居址22箇所、土壙90箇所、集石8箇所が確認された。



第8図 遺構配置図(1:500)

第1号住居址

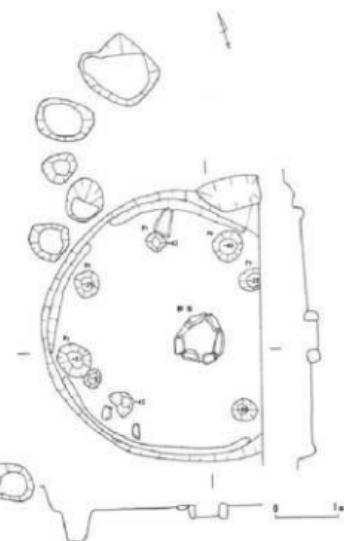
調査地区東側より発見された円形を呈する住居址である。直径約8m80cmを計り、南側には直径約1mの円形の張り出し部がみられる。床はローム層を掘り込んで造られており、壁の内側には西側と東側に周溝が巡らされている。床は平坦で柔らかい。柱穴はP₁, P₂, P₈, P₄, P₆, P₈, P₉が考えられ、P₁, P₂, P₄, P₉の4本主柱穴であったと考えられる。炉址は、比較的小規模な石を組み合わせて造られており浅く、焼土は少ない。遺物の出土は、炉址付近を中心にして多い。西側壁付近に埋甕がみられる。



P 6 第1号住居址

第2号住居址

調査地区の東端に位置する。東側は墓地のため調査ができないかったが、ほぼ円形を呈する住居址と思われる。直径約4m50cmを計る。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦で柔らかい。壁の内側には周溝が巡らされている。柱穴はP₁, P₂, P₃, P₅, P₆, P₇, P₈が考えられる。炉址は、住居址の中央部にあり、比較的小規模な石を組み合わせて造られており、浅く焼土は少ない。住居址北側壁に浅い土壙がみられる。遺物の出土は、住居址全体にわたり多い。出土土器片はいずれも、縄文時代中期後半のものである。また、土製品として土偶の頭部、胴部、臀部の3片が出土した。



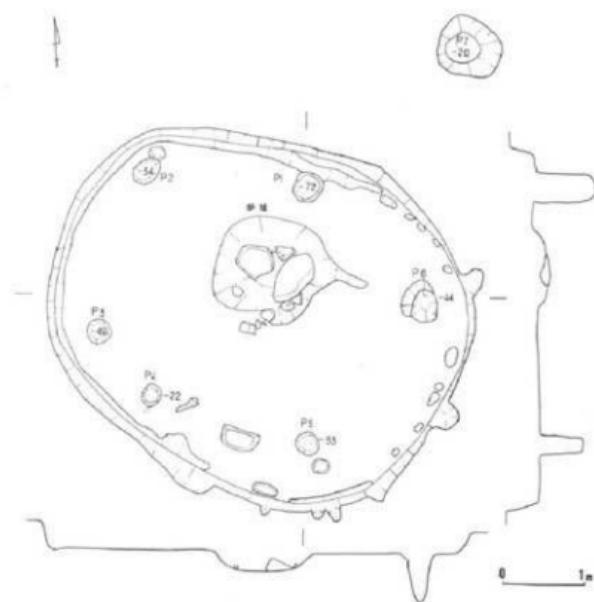
第8図 第2号住居址(1:80)



P 7 第2号住居址

第3号住居址

調査地区南東に位置し、橢円形を呈する住居址である。直徑5m、短径4m20cmを計る。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦で柔らかい。壁の内側、西半分には周溝が巡らされている。柱穴はP₁～P₆の6箇所が考えられる。炉址は中央や西側にあり比較的大きい。遺物は灰付近を中心にして多い。



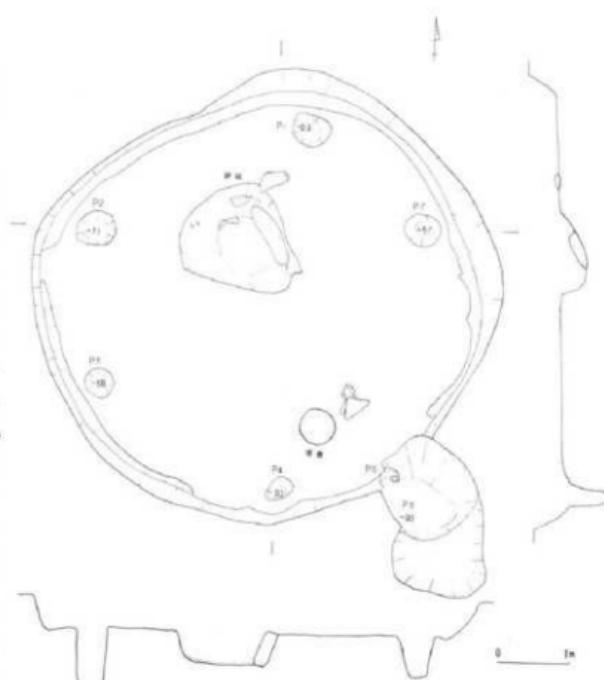
第9図 第3号住居址(1:80)



P 8 第3号住居址

第4号住居址

調査地区の中央やや西側に位置し南側の土壌群に接している。直径約6m20cmの円形を呈する住居址である。住居址南東側壁には大型の土壙がみられる。床はローム層を掘り込んで造られており壁の内側には周溝が造らされている。床は平坦で柔らかい。柱穴はP₁, P₂, P₃, P₄, P₇が考えられる。炉址は、住居址中央やや北側に位置し大形の深いものであり相当量の焼土がみられる。床面中央南東には理麿がみられる。遺物は床面より多量に出土した。いずれも縄文時代中期後半のものである。



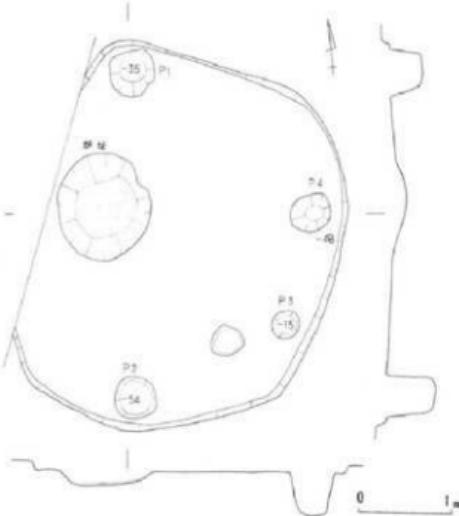
第10図 第4号住居址(1:80)



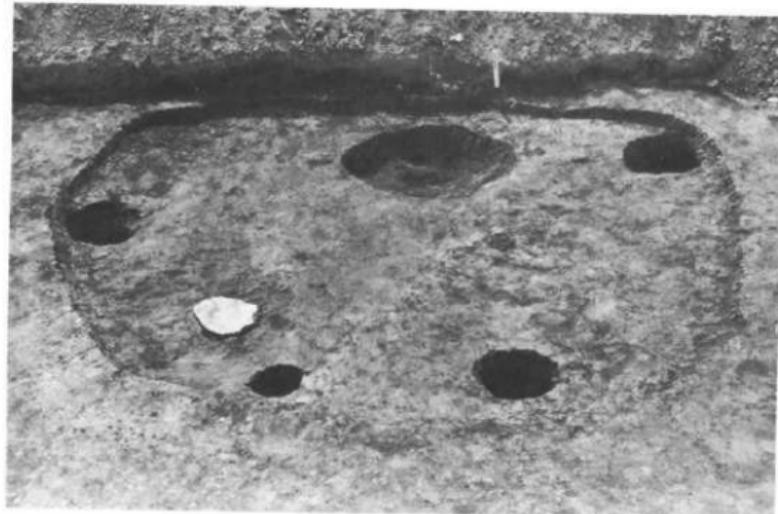
P 9 第4号住居址

第5号住居址

調査地区の東に位置し、第1号住居址に隣接する。住居址西側が道路等により調査できないため明らかでないが、直径約4mの円形を呈する住居址であると思われる。床はローム層を掘り込んで造られており、開田当時に住居址覆土上部を破壊されたものと思われる。床は平坦であるが柔らかい。柱穴はP₁～P₄が確認された。炉址は中央や西側に位置し、炉石は見られない。炉址内部は比較的浅く、底部には相当量の焼土がみられる。遺物の出土は多い。完成品、復元可能の土器はみられない。いずれも縄文時代中期後半のものである。石器としては打製石斧、横刃形石器がみられる。



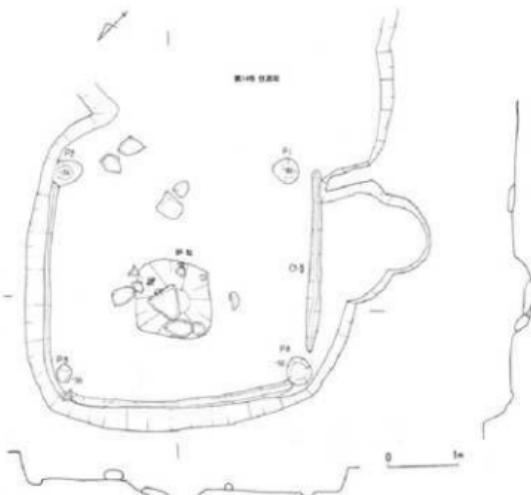
第11図 第5号住居址 (1:60)



P 10 第5号住居址

第6号住居址

調査地区の南東に位置し南側は第14号住居址に接する。1辺4m50cmの隅丸方形に近い形状を呈する。第14号住居址と床面がほぼ同じ高さであり、2つの住居址の時間的な差については明らかでない。住居址は、ローム層を掘り込んで造られており、壁の内側は周溝が巡らされている。床は比較的平坦で柔らかい。柱穴は、P₁～P₄の4本主柱穴であったと考えられる。炉址は中央やや北側に位置し石圓炉であったものと思われる。住居址南西側には大形の土壙がみられる。遺物の出土は多い。いずれも縄文時代中期後半のものである。



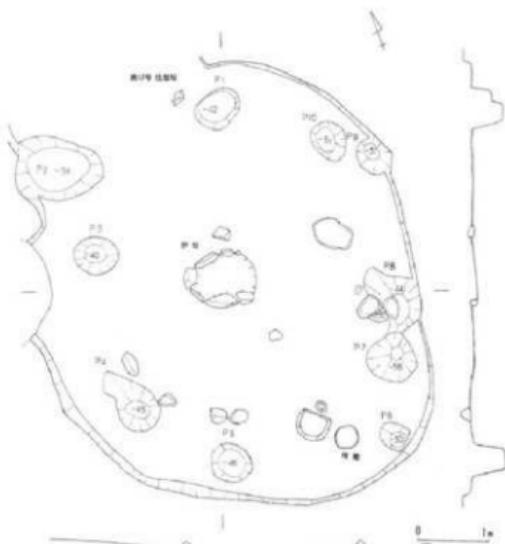
第12図 第6号住居址(1:80)



P 11 第6号住居址

第7号住居址

調査地区南西に位置し、北側は第17号住居址に接し、西側は土壤により一部を壊されている。長径約6m、短径約5m、80cmの椭円形を呈する。第17号住居址と床面が同じ高さであり、2つの住居址の時間的な差については明らかでない。住居址はローム層を掘り込んで造られており、床は平坦であるが比較的柔らかい。柱穴はP₁、P₃、P₄、P₅、P₆、P₇、P₈、P₉、P₁₀が考えられる。炉址は住居址のほぼ中央に位置し、石畳炉で浅く焼土も少ない。住居址南側壁付近に埋廐がみられる。住居址床面には、20~30cm前後の石が多くみられる。遺物の出土は多い。いずれも縄文時代中期後半のものである。



第13図 第7号住居址(1:80)

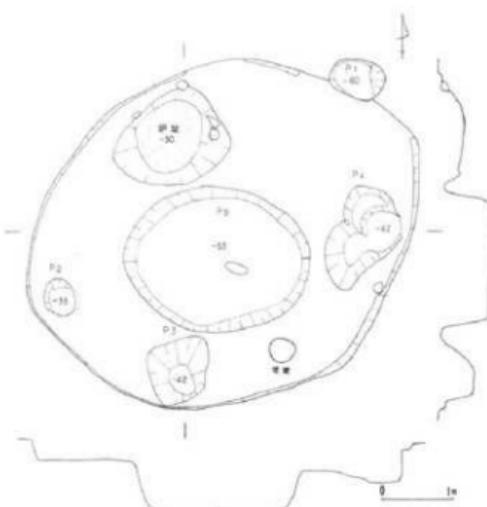


P 12 第7号住居址

第8号住居址

調査地区の北西に位置し、長径約5m80cm、短径約4m50cmの椭円形を有する住居址である。床はローム層を掘り込んで造られており、開田当時に住居址覆土上部を破壊されたものと思われる。床は平坦であるが柔らかい。柱穴は、P₁～P₄が考えられる。炉址は住居址北側壁付近に位置し炉石が抜き取られたものと思われる。住居址中央には長径2m50cm、短径2mの大形の土壙がみられるが、住居址廃絶後に掘り込まれたものと思われる。住民址南側壁付近には埋甕がみられる。遺物の出土は炉址付近を中心にして多い。いずれも縄文時代中期後半のものである。

石器としては打製石斧、横刃形石器がみられる。



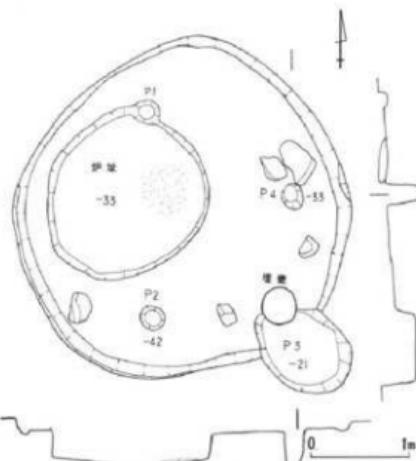
第14図 第8号住居址 (1:80)



P 13 第8号住居址

第9号住居址

調査地区の北西に位置し直径8m50cmの円形を呈する小形の住居址である。床はローム層を掘り込んで造られているが開田当時に破壊されたものと思われ、南西側の一部に壁が残っているのみである。住居址は全体にわたり幅10~20cm、深さ5~10cmの溝が巡らされている。床は比較的平坦で柔らかい。柱穴は、P₁、P₂、P₄、が考えられる。住居址中央やや西側には、直径1m70cm、深さ30~35cmの底部の平坦な掘り込みがあり、その掘り込みの東半分に焼土がみられることから炉址ではないかと考えられる。住居址内南東P₃に接し埋甕がみられる。遺物の出土は多い。いずれも縄文時代中期後半のものである。



第15図 第9号住居址(1:60)



P 14 第9号住居址

第10号住居址

調査地区中央やや北側に位置し長径約5m20cm、短径4m10cmの椭円形を呈する住居址である。住居址は、ローム層を掘り込んで造られている。開拓当時に住居址覆土上部が相当破壊されたと思われ、壁が僅かに残っているだけである。床は平坦で柔らかく、住居址の中央部から南側にかけて不整形をした掘り込みがみられる。この掘り込みは、住居址に関連したものか、後に土壤として掘り込まれたものかは明らかでない。柱穴としてはP₃、P₄、P₆、P₈が考えられる。炉址は中心から北へよってみられ、当時の住居址の北壁は更に北側に広がっていたことも考えられる。P₈北側には、埋甕がみられる。遺物の出土は床面全体にわたり多い。



第16図 第10号住居址 (1:600)



P 15 第10号住居址

第 11号住居址

調査地区の北側に位置し、直径 6m20cm の円形を呈する比較的大形の住居址である。床はローム層を掘り込んで造られており平坦で柔らかい。開田当時に覆土上部が破壊されたものと思われる。壁の内側北半分には周溝が巡らされている。柱穴は P₁, P₂, P₃, P₄, P₅, P₆, P₇, P₈, P₉, P₁₀ が考えられる。炉址は中央やや北東に位置し、炉石が抜き取られたものと思われる。住居址南側壁付近には埋甕がみられる。遺物の出土は他の住居址に比べやや少ない。縄文中期後半。埋甕については有孔、跨付土器である。



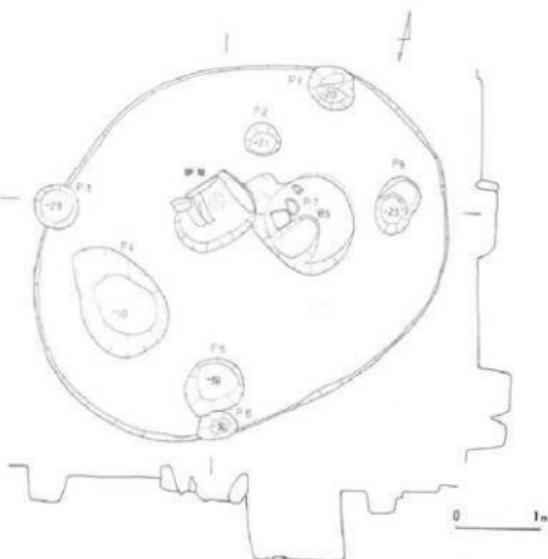
第 17 図 第 11号住居址 (1:80)



P 16 第 11号住居址

第12号住居址

調査地区的北側、第10号、第11号住居址に隣接する。長径5m20cm、短径4m20cmの橢円形を呈する住居址である。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦で柔らかい。開田当時に相当破壊されたと思われ、壁は僅かに残されているだけである。柱穴はP₁、P₃、P₆、P₈が考えられる。炉址は住居址のはば中央に位置し南半分の炉石が抜き取られたものと思われる。焼土は炉址内はば中央にみられる。炉址東側には直徑1m20cmの大形で深い掘り込みがみられる。遺物は縄文時代中期後半のものである。



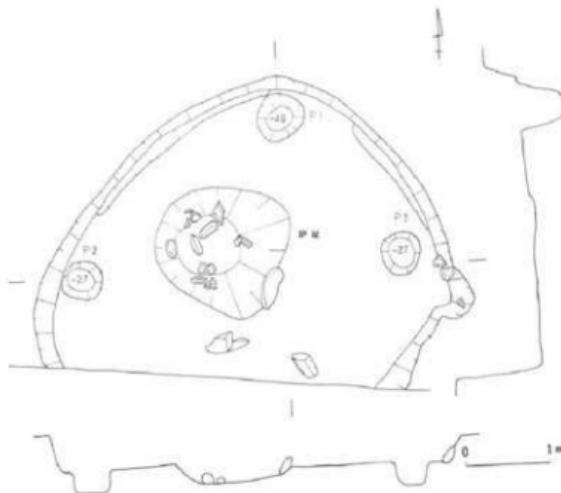
第18図 第12号住居址(1:50)



P 17 第12号住居址

第13号住居址

調査地区の南側に位置する住居址である。住居址の南側は水田の土手のため調査できなかつたが、およそ、長径約4m50cm、短径約4m30cmの橢円形を呈する住居址である。住居址は、ローム層を掘り込んで造られており、床は平坦で柔らかい。柱穴としてはP₁、P₂、P₃が考えられ、4本主柱穴であったと思われる。炉址は中央やや北西に位置し、石壇炉と考えられる。



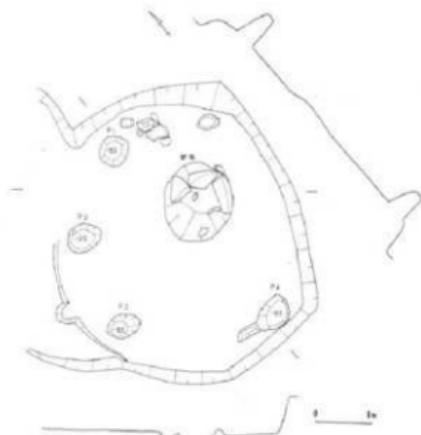
第19図 第13号住居址(1:60)



P 18 第13号住居址

第14号住居址

調査地区の南東側に位置し、北側は第6号住居址に接する。長径5m80cm、短径4m80cmの橢円形を呈する住居址である。住居址はローム層を掘り込んで作られており、西側で僅かに壁がみられるところから、第6号住居址の南半分を基して造られたものと思われる。床は平坦で柔らかい。柱穴としてはP₁、P₃、P₄の3箇所が確認されるが、おそらく4本主柱穴であったと考えられる。炉址は中央やや東側に位置し、石囲炉であったものと思われる。また、住居址北側壁近くには、4個の石に囲まれた自然石の立石がみられる。遺物は縄文時代中期後半。



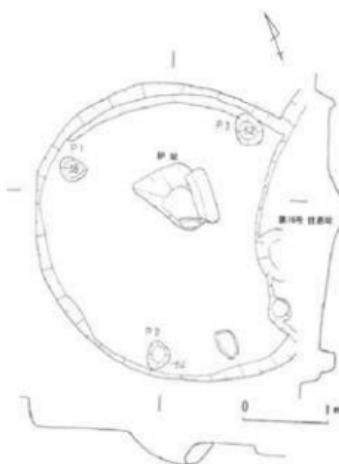
第20図 第14号住居址(1:80)



P 19 第14号住居址

第15号住居址

調査地区の北側に位置し、東側は第16号住居址により埋めされている。長径8m60cm、短径8m40cmの小形の楕円形を呈する住居址である。住居址は、ローム層を掘り込んで作られており、北側壁内側には周溝がみられる。床は平坦で柔らかい。柱穴はP₁、P₂、P₃の3箇所が確認されたが、4本主柱穴であったと思われる。炉址は中央やや北側にあり、東側には2個の炉石がみられる。遺物の出土は住居址全体にわたり多い。いずれも縄文時代中期後半のものである。土製品としては土偶の足部破片が出土した。石器としては打製石斧、横刃石器等がみられる。



第21図 第15号住居址(1:60)



P 20 第15号住居址

第16号住居址

調査地区の北側に位置し、第15号住居址を破壊して造られている。長径4m80cm、短径4m80cmの橢円形を呈する住居址である。住居址は、ローム層を掘り込んで造られており、北東と東側の壁内側には凹溝がみられる。床は平坦で柔らかい。柱穴はP₁ P₂ P₅ P₇の4本主柱穴であったと思われる。炉址は中央やや西側に位置し、4個の大形の石を配して造られている。住居址の南西壁には、直径1m50cmの大形の土壠があり、住居址南壁、P₆付近には埋甕がみられる。遺物の出土は多い。いずれも縄文時代中期後半のものである。



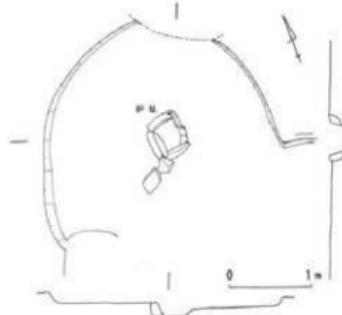
第22図 第16号住居址(1:80)



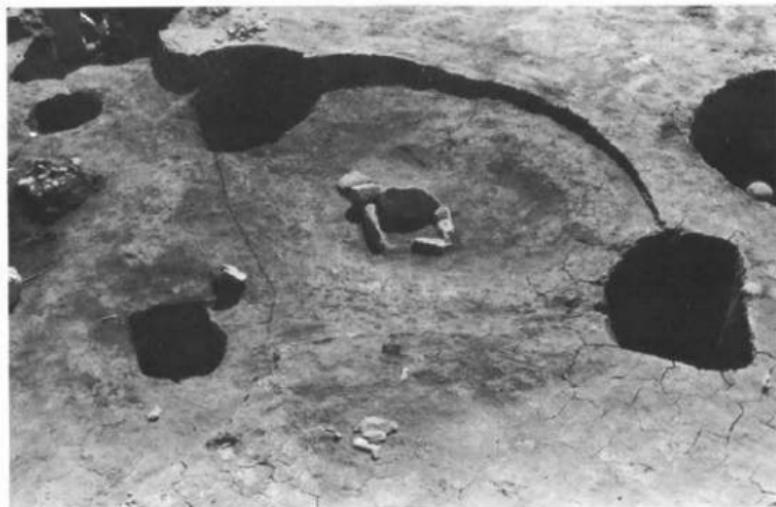
P 21 第16号住居址

第17号住居址

調査地区の南側に位置し、北側の土塁群に隣接する。住居址の形状は、第7号住居址や土壤に接しているため明らかでないが、直径約3mの小形の円形を呈する住居址である。住居址は、ローム層を掘り込んで造られており、床は平坦で柔らかい。壁は水田の開田当時に礎わされており、僅かに残っているのみである。柱穴は確認できなかった。炉址は中央に位置し、小形の石窯炉である。遺物の出土は他の住居址に比べ少ない。いずれも縄文時代中期後半のものである。石器としては、打製石斧、横刃形石器等がみられる。



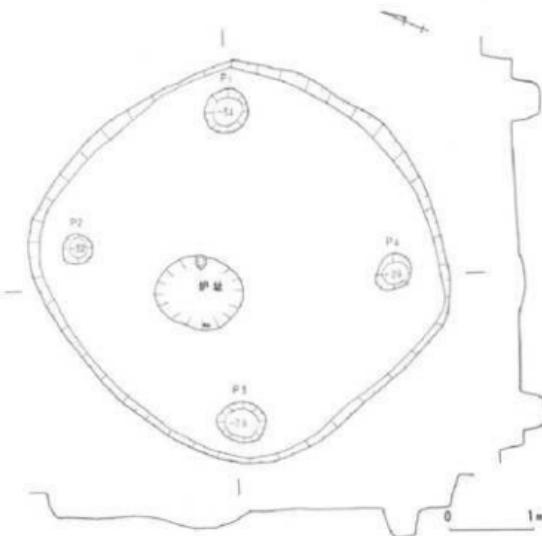
第23図 第17号住居址(1:60)



P 22 第17号住居址

第18号住居址

調査地区西側に位置する1辺4m50cmの隅丸方形の住居址である。住居址は、ローム層を掘り込んで造られており、床は平坦で柔らかい。柱穴はP₁, P₂, P₃, P₄の4本主柱穴である。炉址は中央やや西側に位置し、浅く掘り込まれたものである。遺物の出土が多い。いずれも縄文時代中期後半のものである。石器は打製石斧、横刃形石器等である。



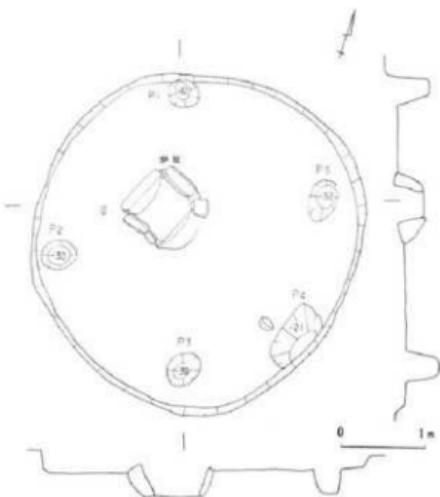
第24図 第18号住居址(1:60)



P 23 第18号住居址

第19号住居址

調査地区の西側に位置する直径約4mの円形を呈する住居址である。床はローム層を掘り込んで造られており、平坦で柔らかい。柱穴(P₁・P₂・P₃・P₅)の4本主柱穴である。炉は中央やや西側に位置し、石頭炉である。遺物は住居址の床面を中心にして多量に出土した。いずれも縄文時代中期後半のものである。石器は打製石斧、横刃形石器、黒燧石剥片等である。



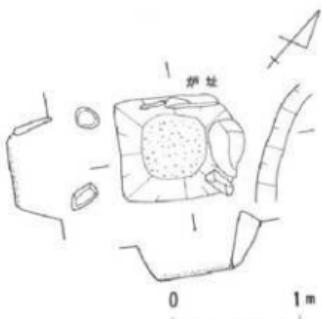
第25図 第19号住居址(1:60)



P 24 第19号住居址

第20号住居址

調査地区の西側に位置する住居址である。開田してよりの住居址の大部分が埋されており、残された炉址により、住居址が確認された。また、炉址の東側は、第22号住居址により礎わされている。炉址は石窯炉であったと思われ、僅かに灰石がみられる。炉の底部には多くの焼土がみられる。遺物は炉址付近床面より出土した。いずれも縄文時代中期後半のものである。



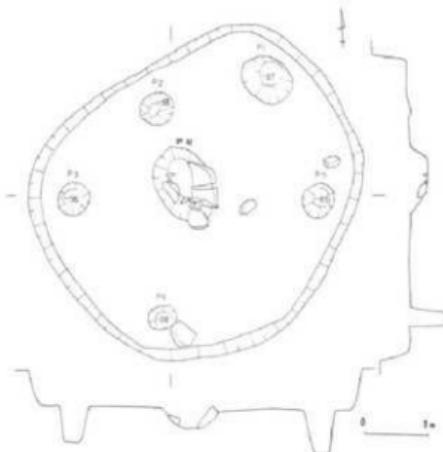
第26図 第20号住居址(1:40)



P 25 第20号住居址

第21号住居址

調査地区の北西側に位置する長径5m
20cm、短径4m50cmの橢円形に近い住居
址である。床はローム層を掘り込んで造
られており、平坦で柔らかい。柱穴はP₁
P₃、P₄、P₅の4本主柱穴で、P₂は補助柱
穴であったと思われる。炉址は住居址の
ほぼ中央に位置し、橢円形である。炉址
内には焼土はほとんどみられない。遺物
は炉址付近を中心にして多量に出土した。
いずれも縄文時代中期後半のものである。
土製品として土偶の腕部破片が出土した。



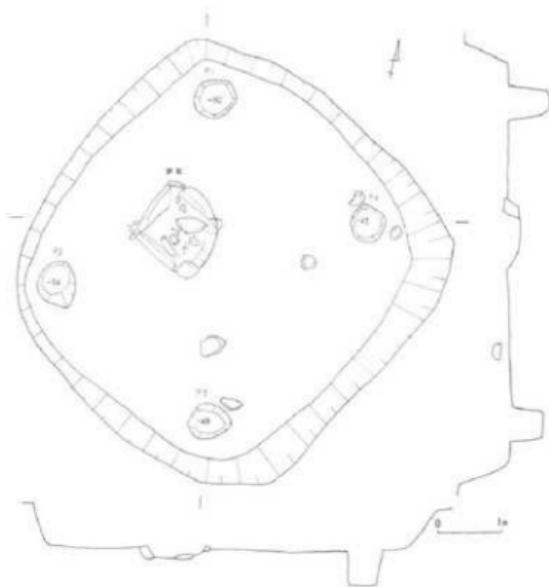
第27図 第21号住居址(1:80)



P 26 第21号住居址

第22号住居址

調査地区の西側に位置する1辺5m90cmの大形の隅丸方形の住居址である。住居址は、ローム層を深く掘り込んで造られており、床は平担で硬い。柱穴はP₁, P₂, P₃, P₄の4本主柱穴である。炉址は中央ほぼ西側に位置し、大形の石圓炉である。遺物は住居址全体により多量に出土した。いずれも縄文時代中期後半のものである。



第28図 第22号住居址

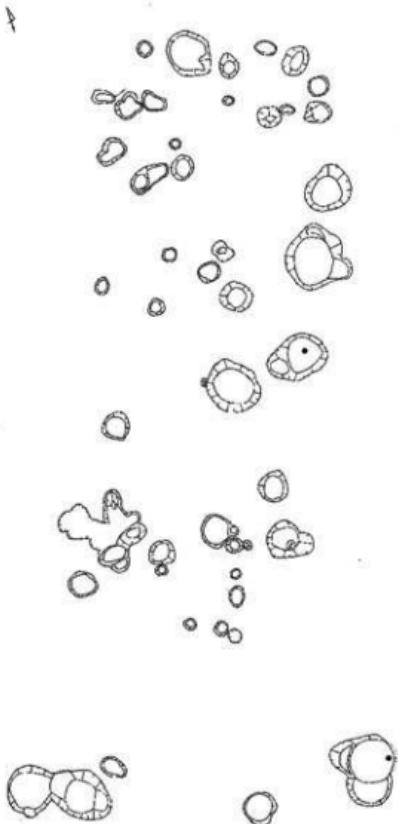


P 27 第22号住居址

土 壤

調査地区の中央南側、住居址にとり囲まれるような形で大小約90の土壙が検出された。土壙は、ローム層を掘り込んで造られており、形状は円形のもの橢円形のもの、不整形のもの等まちまちであり、深さも一定していない。土壙内からの遺物の出土は少なく、土壙内に石のみられるものもわずかある。出土した遺物は、すべて縄文時代中期のものである。

(●印は土器の出土したもの)



第29図 土壙(C地区)

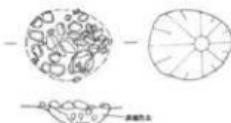


第30図 土壙(D地区)

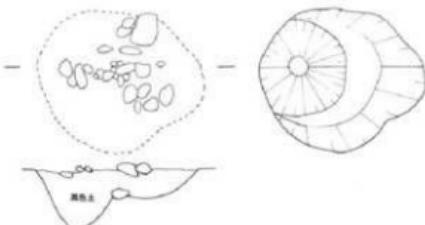
集石を伴なう土壙

調査地区の中央東側、第6・14号住居址の北側に3箇所検出された。いずれも円形、楕円形にローム層を掘り込んで造られている。No.1は黒褐色土の覆土の中に5~20cmの小形の石が全体にみられる。No.2は土壙の北半分に中段があり、石は土壙上面に集中している。No.3は規模が最も大きく石の数も多い。石は土壙上面と底部付近に比較的集中してみられ、底部の石は熱を受けて風化した礫片が多い。

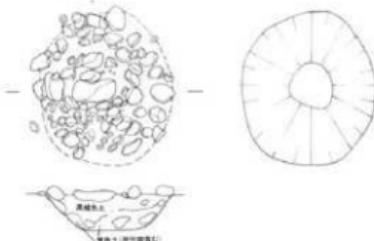
遺物はNo.1の覆土よりわずかに土器の小破片が出土したのみである。



第31図 第1号集石(1:30)



第32図 第2号集石(1:30)



第33図 第3号集石(1:30)

P 28 B地区近影

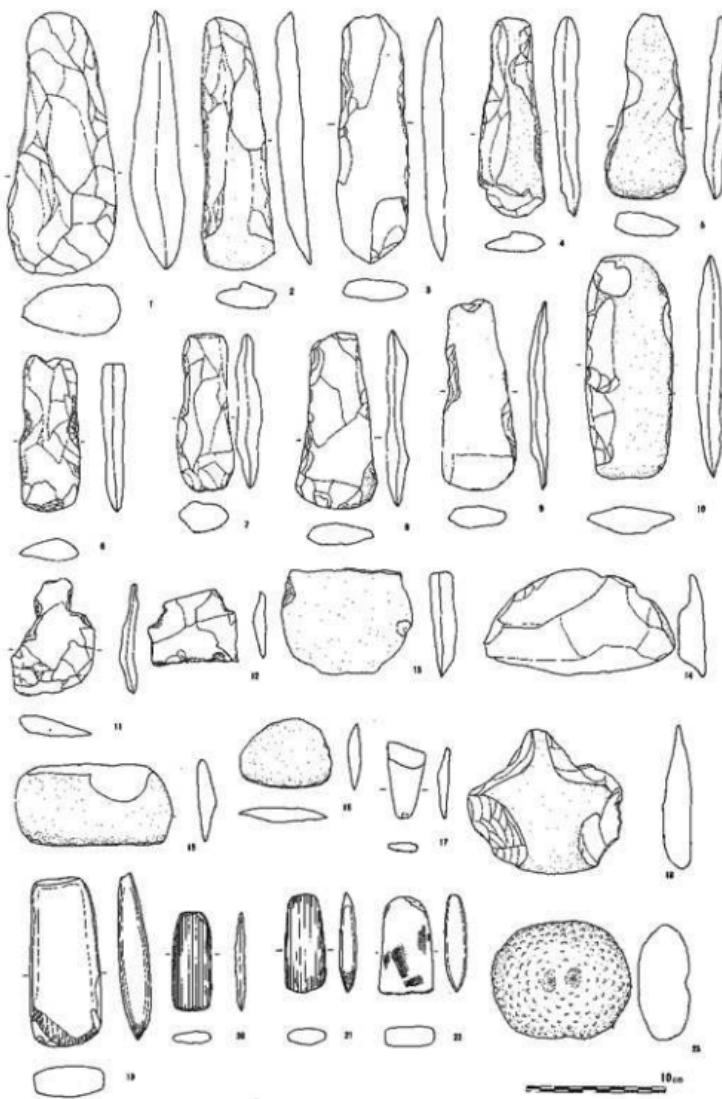


第2節 遺物

今回の調査で出土した土器は、縄文時代早期、後期の土器片数点を除き、ほとんどが縄文時代中期後半の土器である。土器は調査地区全体から出土したが、特に住居址から多く、又埋甕も數多くみられる。石器についても、打製石斧、横刃形石器を中心に數多くみられる。土製石としては、土陶の破損品が8個検出された。



P 29 出土土偶



3・9(1件), 4~7(2件), 1(3件), 22(6件), 2・12・18(7件), 13(8件), 20(11件),
15・16(12件), 8・19(13件), 17(14件), 10(15件), 23(16件), 14(19件),
11(21件), 21(22件)

第34図 出土石器(1:4)

第V章 まとめ

本遺跡は、昭和54年度県営甫場整備に伴う埋蔵文化財緊急発掘であるため、その資料の取扱いに重点をおき、研究及び考察は長時間を必要とするため、それは後日にゆることとし、ここでは調査中に知り得た2・3の問題点についてふれ、所見とした。

1. 北原遺跡は中央道が通過した地点で東西2遺跡に区分された。そのうち東遺跡の一部は中央道発掘調査団によって調査が行なわれ、縄文中期末葉の住居址1軒と土壙1基が発見された。今回は中央道敷地の東側に当る個所を調査することになった。調査の結果、縄文時代中期末葉の土器片と打製石斧、横刃形石器各1点の出土をみたのみで遺構らしきものは発見できなかつた。

当遺跡は、北原西遺跡の外郭に当たる遺跡であることが確認されたことは遺跡の範囲を知る上で重要なこととなつた。

2. 北原西遺跡は東遺跡と合体の遺跡と考えられる遺跡である。本遺跡は古くから知られていた遺跡である。今回の調査では前回発見されていた縄文早期押型文及縄文中期の遺物や遺構の出土をねらっていたのであるが、調査の結果、縄文中期住居址22軒と土壙90基及び集石土壙3基が発見された。

出土した遺構から集落は南側の段丘に沿って馬蹄形に分布していることが確認された。また、その中央には大小の土壙群が認められ集落と空間地帯の関係を知る上に重要な資料となつた。

3. 住居址について。発見された住居址22軒、そのうち円形プランの住居址9、楕円形9、隅丸方形3、不明1。住居址の規模は4mまで7軒、5mまで6軒、6mまで8軒、不明1軒で、6mクラスが一番多いことがわかった。

4. 柱穴は、4本柱が13軒、5本柱が2軒、不明1で、そのうち4本柱が約半数以上を占めていることがわかる。このことは建築を知る上で重要なことである。

5. 炉址は、石匂炉であるが、完全に残ったものが6軒で他は炉石が抜き取られている。炉石の再使用かまたはそれ以外の意味があるのか興味深いことである。

6. 墓塚は、第1.4.7.8.9.10.11.16号住居址に発見された。埋葬の発見された位置は第10号を除いて南東の方向に集中していることは共通性をもっている様にも考えられ今後研究の余地が考えられる。

7. 土偶。七久保地区の遺跡からは土偶の出土が非常に多い。いずれも破片ではあるが49個が発見されている。今回の調査では全体で8個発見することができた。その内訳は頭部が2個、胸部が2個、臀部2個、脚部1個、腕部が1個である。土偶が集中して発見された住居址は2号住居址で、頭部1、胸部1、臀部1が発見されている。この様に集落の中で特に土偶の出土の多い家があることは注目すべきことである。

8. 土器。有孔縫付の土器は文様器形からして井戸尻Ⅱ期頃と考えられるが、なぜ曾利Ⅰ式～Ⅲ式の土器に混じて埋葬に使用されたかが問題である。一般的に埋葬は曾利Ⅰ～Ⅲ式頃といわれているから、有孔縫付土器の埋葬は問題となる。その他の埋葬は唐草文様Ⅰ～Ⅲ期の型式と考えられる。14号住居址の土器は曾利、加曾利E式には見当らない土器である。



P 30 A地区(南より)



P 31 D・E地区(北より)



P 3 2 F地区(南より)



P 3 3 D地区(北より)



P 3 4 C地区(北より)



第 11 号住



第 1 号住



第 4 号住



4

第 9 号住



5

第 10 号住



6

第 14 号住



7

第 16 号住



8

第 21 号住



9

P 35 出土土器



10

第 15 号住

北原東・北原西
—緊急発掘調査報告—

昭和55年3月20日 印刷
昭和55年3月25日 発行

発行所 長野県上伊那郡飯島町
南信土地改良事務所

印刷所 藤原印刷株式会社
松本市新橋7-21
☎0263(33)5092(代)

